「七萬石とうがらし」に決定

特産化推進会議

延岡産「内藤とうがらし」の商標名

4/5

内藤とうがらし特産化推進会議（松田宗史会長）は3日、延岡市祝子地区で栽培を進めている「内藤とうがらし」について、延岡の農産ブランド育成などを目的に商標名を「日向の国延岡藩内藤家『七萬石とうがらし』」として、市内外に販売展開すると発表した。

「七萬石とうがらし」を粉状に加工した新商品。延岡市内の道の駅などで販売する

内藤家の縁で栽培

内藤とうがらしは、延岡藩主・内藤家と始祖を同じくする高遠藩内藤家が江戸下屋敷で栽培した八房系の唐辛子。絶滅していたが、近年、東京・新宿で復活プロジェクトがスタート。延岡市では、内藤家の縁で5本の唐辛子を譲り受け、平成27年から栽培が進んでいる。

延岡市内では現在、生産者6人が計20アールで栽培。最初の植え付けから3年が過ぎ、生産技術など栽培が継続できるめどが立ったことや、市が食の魅力を生かした観光誘客に取り組んでいる点から、今後は加工・販売に力を入れようとより延岡色が出る名称に決めた。

東京・新宿の復活プロジェクトとの連携は続けていくという。

まずは、市内や県内の飲食店を中心に、特徴の優しい辛みや香りの良さなどの魅力を売り込み、県外にも展開を広げていく方針。加えて、粉状にした土産用の缶入り商品（10グラム入り・税込み1080円）を道の駅で販売するなど、加工品の開発や販売にも力を入れる。

松田会長は「七萬石とうがらし」の名称を広げていきたい。無農薬で栽培しているので安心、また、一年中出荷できるため多くの方に食べていただければ。延岡の特産品として成長していけるよう活動していきたい」と話している。

2018.4.5

夕刊デイリー

観光客誘致「延岡城アプリ」

ケーブルメディアワイワイが制作

延岡城の歴史的価値を再認識し観光誘客につなげようと、ケーブルメディアワイワイは、「延岡城アプリ」を制作した。AR（拡張現実）やVR（仮想現実）などの映像技術で往時の城の様子や景色が楽しめる機能などがあり、スマートフォンやタブレットを使って延岡城を学びながら巡ることができる。

「復元AR」の二階門櫓の画像（上）見どころMAPの画像（下）

現在の延岡城は石垣遺構を残すのみだが、アプリには、仮想空間の中で三階櫓（やぐら）の様子を見ることができる「復元VR」や、櫓や門などの建築物を現在の風景の中に擬似的に再現した「復元AR」、延岡城に関する質問に答える人工知能を活用した「AIガイド」などの技術を使った機能を搭載。

このほか、城の概要や年表などが確認できる「延岡城の歴史」、城内のお薦め観光ルートの紹介と北大手門や千人殺しの石垣など18カ所を写真で解説する「見どころMAP」、城の魅力を学ぶ「延岡城検定」、城山を巡る「謎解きゲーム」なども楽しめる。

使用方法はスマートフォンやタブレットからアプリをダウンロードする。「復元AR」や「謎解きゲーム」は、現地に行かないと体験できない機能となっている。

制作には、延岡ガイド・ボランティアの会会長の九鬼勉さん、延岡史談会副会長の甲斐典明さんが監修、内山登世子さんが3DCG制作、市が各種資料提供などに協力。事業費は約400万円。市は制作費の一部として100万円を補助している。

同社は『続日本100名城』に選ばれ、城郭ファンに注目される延岡城の認知度を高めることで観光誘客に、市民が城の歴史的価値を再認識し、郷土の誇りの醸成につながるきっかけになれば」と話している。

2018.4.5